

氏名	吉 田 登志子
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	歯 学
学位授与番号	博甲第 1719 号
学位授与の日付	平成10年3月25日
学位授与の要件	歯学研究科歯学専攻（学位規則第4条第1項該当）
学位論文題名	The assessment of dental anxiety:its relationships with trait anxiety, state anxiety, and nasal skin temperature (歯科不安の評価に関する研究—特性不安と状態不安および鼻部皮膚表面温度との関連性—)
論文審査委員	教授 岸 幹二 教授 足立 明 教授 下野 勉

学位論文内容の要旨

【研究目的】

歯科不安や恐怖が患者の受療行動を阻む要因であることは広く認識されており、それらについての研究がなされている。心理学的観点からは、歯科不安は性格特性が関与しているのではないかという仮定のもとに、歯科不安と特性不安との関連性について研究が行われているが、統一した見解は得られていない。また、歯科不安を状況によって変化する状態不安として捉えている報告がみられるが、その関連性についての報告は少ない。さらに、心理学的な歯科不安を生理学的指標で捉えていこうとする研究もみられるが散見するにすぎず、その関連性についても不明瞭である。そこで本研究では、歯科不安と特性不安および状態不安との関連性を検討し、さらに歯科不安と生理反応との関連性を検討した。

【対象と方法】

研究1：成人を対象とした研究

1) 模擬診療を受けることが心理的不安を生起させ、かつ生理学的変化を喚起させるかを検討するために、同意の得られた学生31名を対象に、模擬診療を行うことを告げた場合と、模擬診療を行わないと告げた場合で比較検討した。日本版状態・特性不安検査(State-Trait Anxiety Inventory, STAI, 三京房)と歯科不安を問う質問紙表を用いて心理的不安を検査した。また、生理学的変化としては心理的不安を検査した後、15分間安静にさせ、AGEMA社製 Thermovision 870を用い鼻部皮膚表面温度を測定した。

2) 歯科不安と特性不安および状態不安、さらにそれらそれぞれの不安と診療時の鼻部皮膚表面温度との関連性を検討するために、同意の得られた学生90名を対象に心理的不安を測定した後、15分間安静にし、浸潤麻酔を行い、ラバーダム装着後、ラバーカップにて歯面清掃を行い鼻部皮膚表面温度を測定した。

研究2：小児を対象とした研究

1) 本学小児歯科において歯科治療を受けた9歳から12歳の小児を対象として、その後定期健診で来院した同意の得られた40名について、歯科治療

が心理的不安を生起させるかを検討した。治療前に日本版児童用状態・特性不安検査 (State-Trait Anxiety Inventory for Children, STAIC) と歯科不安を問う質問紙表を用い心理的不安を調べ、定期健診終了後、再び同じ質問紙表を用いて心理的不安の検査を行った。

2) 歯科不安と特性不安および状態不安、さらにそれらそれぞれの不安と治療時の鼻部表面温度との関連性を検討するために、同意の得られた 9 歳から 12 歳の 232 名を対象に、STAIC と歯科不安を問う質問紙表を用い心理的不安の検査を行った。このうち抜歯の処置を必要とする 50 名を対象に、治療中の鼻部皮膚表面温度を測定した。

【結果】

研究 1：成人を対象とした研究

1) 成人においては模擬診療を行わないと告げた場合より、模擬診療を行うと告げた場合の方が状態不安は有意に高い値を示した ($p < 0.001$) が、特性不安、歯科不安に関しては有意な差は認めなかった。安静時での鼻部皮膚表面温度の変動係数と変化幅は、模擬診療を行わないと告げた場合より、模擬診療を行うと告げた場合の方が有意に大きい値を示した ($p < 0.05$)。

2) 歯科不安と特性不安の間には有意な相関関係は認めなかったが、歯科不安と状態不安の間には有意な正の相関関係が認められた ($p < 0.01$)。治療過程の鼻部皮膚表面温度の変動係数と変化幅は、状態不安の程度により有意な差が認められた ($p < 0.05$) が、特性不安、歯科不安のいずれの程度とも有意な差は認めなかった。

研究 2：小児を対象とした研究

1) 小児においては治療後より治療前の方が状態不安は有意に高い値を示した ($p < 0.001$) が、特性不安、歯科不安に関しては有意な差は認めなかった。

2) 歯科不安と特性不安および状態不安のいずれの間にも有意な正の相関関係が認められた ($p < 0.01$)。治療過程の鼻部皮膚表面温度の変動係数および変化幅は、状態不安、特性不安および歯科不安のいずれの程度とも有意な差は認めなかった。

【考察および結論】

成人を対象とした研究では、模擬診療を行うと告げた場合、状態不安と生理学的変化を喚起させることが示唆された。また、不安になりやすい人が必ずしも歯科不安が高いとは限らないことが示唆された。さらに、鼻部皮膚表面温度が治療前の状態不安とのみ関連性がみられたことは、生理的反応は歯科不安や特性不安のように比較的变化しにくい不安より、むしろその時の一過性の状態を反映するものと考えられる。

小児を対象とした研究では、歯科治療を受けることが状態不安を生起させることが、また不安になりやすい患児は歯科不安も高いことが示唆された。さらに、鼻部皮膚表面温度と状態不安との関連性が見られなかったことは、小児は不安を行動に表出し易く、それが生理学的変化と心理的不安の間にズレを生じさせている可能性が考えられる。

以上より歯科不安と状態不安とは関連性があり、また歯科不安と特性不安の関係は成人と小児では異なることが示された。

論文審査結果の要旨

本研究は心理的な歯科不安と、個人の不安傾向を示す特性不安、および状況によって変化する状態不安との関連性を検討し、さらに心理的歯科不安と生理学的反応の関連性について検討したのものである。歯科不安と特性不安および状態不安は自己評価法で検査し、診療中の生理学的反応はサーモグラフィによる鼻部皮膚表面温度変化を指標として用い比較、検討した。成人を対象として実験的に、さらに小児を対象として実際の臨床の場面で検討した。

歯科不安と状態不安との関連性は成人と小児ともに認められた。また、歯科不安と特性不安との関連性は成人では認められなかったが、小児においては認められた。さらに、歯科不安と鼻部皮膚表面温度については成人と小児ともに関連性が認められなかった。しかしながら、成人において状態不安と鼻部皮膚表面温度との関連性が認められ、かつ、状態不安と歯科不安との相関関係が認められた。これらの事実より、歯科治療に対する不安は治療前の状態不安に影響を及ぼすが、生理学的反応は歯科不安のような比較的变化しにくい不安より、むしろその時の一過性の不安を反映しえることが示唆された。

以上のように本研究は歯科治療に対する不安と特性不安、および治療前の状態不安との関連性について、さらに心理的不安と生理学的変化の関連性について新知見を示した重要な研究と考えられる。よって本研究者は博士（歯学）の学位を得る資格があると認める。